

# 「音楽リズム」の成り立ちについて



坂元彦太郎

〈1〉

わが国の幼稚園教育において、「音楽リズム」という語が、現在使われているような意味に用いられるようになったのが、終戦直後からであることはいうまでもない。そのとき、私はちょうど、文部省の青少年教育課長であって、学校教育法の中に幼稚園を盛り込むようにつとめ、その目的や目標を適正にいいあらわすことに苦心していた。

外の点はとにかくとして、「音楽・リズム」ということばを、公式の場所に押し出そうと私が企だてた最初の試みは、学校教育法の幼稚園の五目標のうちの最後のものに、入れようとしたことであった。現在の同法では「音楽、遊戯、絵画等の方法により、創作的表現に対する興味を養う」となっているが、実はそのはじめの原案には、私は次のように書いたのであった。

「音楽・リズム・絵画・製作などによる創作的表現に対する興味を養うこと」。

文部省内や、そのころの支配者であった占領軍司令部の人たちの関門は通過することに成功したが、内閣の法制局による条文の審議にかかって、さまざまに突っ込まれたのである。そのころまでは、こうしたカタカナを法律の条文に出した例はない、ということの上には、さんざんにやられたのであった。むろん、こうしたときのやりとりは、非常に機知に富んだユーモアをこめて、楽しみながら（？）やっていたのであって、活字にした時の誤解をおそれるのであるが、たとえば、次のような放言（？）があったことをおぼえている。

「リズムといったら、音楽の三要素の一つではないか。だから、音楽・リズムと重ねることは無意味ではないか。」と、学のある指摘である。「いや、ここで、リズムというのは、ハーモニイやメロデイとならぶ場合のリズムではなくて、いわば人間の心身に内在して

いるリズムが身体の動きに具体化したものをいうのだ」といったやうなことを私が答えると、「そういう説明では一般の人には分りっこない。実際に、どんなやうなことを指しているのか。」とたたみかけてくる。

「あなたがたが小さい時に、行進遊戯だとか、表情遊戯だとかいうものをやらせられたでしょう。いわゆる、おゆうぎといっているやうな種類のものをいうのですよ。」と答える。

すると、それでは「遊戯」としておけばいいじゃないか、との託宣である。「いや、それではうまくないから、何とか新しいことばでいいかえたいのだ。」

とは答えたものの、リズムではいけない、とりあえず「遊戯」ということにしておけ、といわれて、やむをえず一応そうしておいて再度の審議のときに、何とかしようと、策戦をたてなおしたのであったが、次の審議の機会は、もう議会に法案提出の締切り間際になつてしまつて、いわば時間切れで逆にそのままになつてしまつたのである。

## 〈2〉

とるに足らないやうないききつから述べたしたのは、私たちが、新らしい名前をつけることによつて、いわば革ぶくろを新らしくすることによつて、その中味を一新しようとした気持ちや努力を述べ

たいがためである。

むろん、私は全くのしろうとである。しかし、そのころまでの幼児保育界において、音楽リズムの領域に属するやうな問題、そのうちでも殊にリズムに関する方面の問題が、理論的にもまた実際的にも、ほとんど百鬼夜行のかたちだつた、といえはいい過ぎになるが、とにかく全くよりのないやうな混乱状態であつた、と私どもは感じていた。人間にとつて、そのうちでも特に幼児にとつていちばん大切な活動であり、人間の奥底に触れる生命の躍動でもあるところの心も一体になつたからだの律動的な動きは、わが國の保育界では形の上では重要視されすぎるほどであつたが、實質からいへば、たましいのいない、外からのわくにはまつた「おゆうぎ」であり、「おどり」のまねでしかなかつた。私は、ずぶのしろうとであつただけに、大胆にも、この分野に新風をみちびき入れたいと願つたのであつた。

こつちやうな種類の幼児の活動を何とよぶか、そこに一つの大きな問題があると考えた。舞踊といつても、舞踏といつても、バレエやダンスでも、また「おゆうぎ」でも、それぞれの偏りをもつていて不十分である。あつた名前は、適切な名前を人々が共通にもたないことからも来ているのであつた。内面的な律動をからだの動きに具体化するという点では、英語のリズミック、ドイツ語のリトミックあたりが適當ではないか、と思つたが、これは、すでに、昭和のは

じめに日本の教育界に輸入された一派の体育運動に名告けられてしまっているのである。

いろいろ考えているうちに、私は英語に、リズムスということばが使われていることを知ったのであった。普通のリズムスという抽象名詞に、複数のSをつけたことばである。由來、日本人には、英語などの複数語形のもつニュアンスは非常に分りにくいのであるが、このリズムスは抽象名詞ではなくて、リズム的なきまざまな遊びをひっくりかかすという普通名詞になっているのである。そして、幼児の教育にも、しばしばこのリズムスなるものが登場しているのであるが、私は、これと大体同じ意味に、リズムスということばをつかって、日本の教育界に登場させよう、と思ったのであった。

しかし、その最初の突撃は、法制局のかたくなな抵抗にあって、あえなく失敗におわってしまったのであった。

### 〈3〉

第二番目に私がくわだて、そしてそれが遂に成功したのは、「保育要領」の編集の中に織りこむことであった。厳密に言えば、前述の学校教育法に入れこむことと平行して計画していたのであったが、法律の方には目付役の関門が多くつよかったのに対して、「保育要領」の方は、こちらの思う通りに運んだだけであった。昭和二十二年のはじめに出版された、保育要領には、六幼児の保育内容の

2リズムという節があるが、これがこのような意味に使われた最初の公式の文書である。わずかに二ページ千三百字の記述に過ぎないが、これができるまでには随分苦労を重ね、しかも、残念ながら遂に不満のままで公刊せざるをえなかった。

というのは、新しい「リズム」は、いままでのように、さるまわしのようにこどもをあやつるのでもなく、ダンスやバレエのまねをさせるのでもなく、ほんとうにこどもたちの心やからだのなかからわきでた動きを、心から楽しみながらあそびまわるようなものにした、との私のねがいは、この項の執筆を分担した人たちには、なかなか理解されなかった。いや、理解はされたのであろうが、現実に園でいとなまれているような具体的な活動としてこれを説明することは、はなはだ困難であった。といって、ずぶのしろうとの私がこの項を執筆したり、著しく担当者の原稿に筆をいれるようなことはあまりにも大それたことであった。したがって、できたものにはえ切らない中途はんばなものになってしまった。いまにして思えば、せんえつなことであるが、自分で空理にわたってもいいから、執筆しておけばよかつたような気もしている。

昭和二十二年度を迎えて、私が企だてたのは、この中途半端に生みおとした「リズム」を、何とか目鼻をつけたり、成長させたりしようとするのであった。幸い、「保育要領改訂委員会」のための少しばかりの予算をとった（これが、わが国で国家予算に幼稚園の

ことがのつた最初であった)ので、名目はこうした大きな委員会にしておきながら、音楽リズムについての研究を一歩進めることのできるような人たちばかりに集まっていたことにしたのであった。

ところが、打ち明けていえば、その人選には困った。既存の各流派(?)の代表を集めればそれまでであるが、ほんとうに幼児の教育の現実在即しながら、新風を入れようとするには、なかなか適当な人選ができなかった。そのうちに、諸井三郎さんの紹介で新舞踊家の邦正美氏に参加してもらうことになった。このことが、さまざまな波らんをよんだようでもあるが、やはり、同氏の識見のなにものが、斯界の向上に刺戟をあたえたように、私は観察している。

そうこうしているうちに、私は事情もあって文部省を去り、邦さんも同委員会と縁を切られたようだが、同委員会はそれからも断続して開かれ、その所産として、昭和二十八年に文部省から指導書・音楽リズム篇が出ることになったのである。

卒直にいえば、この指導書はいわゆる別として、はじめの頃の案にくらべればずっとおとなしいものになってしまっているうえに、リズムの方にもっと積極的な意味がほしいものだ、と出版当時私は思ったのであった。

昭和三十一年になって、「保育要領」の代りに幼稚園教育要領が出版されたが、幼稚園教育内容としてたてられた六領域の一つに、

音楽リズムがあげられている。幼稚園教育要領の性格からして、ここにあげてあることが十分だと私が思わないことをいっても仕方がないであろうが、少なくとも、動きのリズムに関する側の「発達上の特質」なり、「望ましい経験」なりの記述があまりにも貧弱であることを指摘するのは認められていいであろう。

いずれにしても、音楽リズムの領域に属することがらは、みんなわかっているようで、そうみんながやっているからやっていると、たよりで、理論的にも実際的にもわり切れないものがたくさん残っている。そして、それらは、決してかんたんには解きほぐすことのできない深いもつれを中に藏している。このことは、この領域に属するものが、人間生活の深い基底に通ずるものをもっている証拠であるとさえいえよう。

さらに、幼稚園教育の全教育課程の中に、音楽リズムをどう位置づけるか、ということも、私はこの次の機会に考えてみたいことがある。ほんとに、幼児の心身の根源から発するからだの動きを通じ、幼児たちに心からの喜びを与え、しかも、その成長発達に大いに役立つようにするには、どうしたらいいか、さらに、音楽とリズムを切りはなさないで、その両者が深く結びついたままの体験を一層つよくもたせるには、どうしたらいいか、——こういったことも、研究されねばならない課題である。

(お茶の水女子大学)